



故郷は遠くに離れていた。「心やさしくさえあれば ここからは永遠が観える 西の果てなる夕暮れの城跡に佇めば 遙かなた仄の海に夕陽揺れる 時は流れ 夢はうつろい 人恋し

言葉も生きています

別離の朝に頬を染めて 祈ってくれたあの人はいずこ。「人恋し」である。なんに限らず継続することに意味がある。ただし、いいことならばである。わたしが劇団を継続できたのは「笑われたくない」の意地であった。解散すれば「やっぱりな」

祈ってくれた。只の意味はわからなかった。だけど、只の人にはなりたくなかった。「継続は力なり」とはよくいったものである。本多一夫氏は只者ではなかった。

「修羅場にて候」はボクシングがテーマの芝居である。新宿ジモピアノも埃をかぶってそのままであった。「凄いいことになりましたねえ」と劇団員がいった。「ああ、修羅場だなあ」。それがそのまま「修羅場にて候」の題名になった。

それまでは松浦の言葉で書いていたが、この作品では関東のそんな時代だった。新劇の衰退のひとつに言葉があった。言葉も生きています。言葉である。アングラという言葉が流行った。アングラ演劇である。舞台は、架空の土地である。架空の土地ではあったが、川崎辺りを念頭に書いていた。工業地帯川崎である。いつも土砂降りの雨が降っている土地である。土砂降りにあちこちが雨漏りをしているボクシングジムである。いくつものバケツにトーンとトーンと雨漏りがしている。これは効果的であった。これも対立のドラマであった。登場人物一人一人に恨むべき過去や人間関係や現実がある。

と笑われる。解散を考えた時期もあった。疲れ果てていた。金銭はもちろん、精神も肉体でもある。いろいろな人に相談したが、だれもが「やめちゃいなよ」といった。一人、本多劇場の本多一夫氏だけは「耕大さん、いまやめれば只の人だよ」と励ま

にカフェアトロ新宿もりえーるがオープンすることになった。1982年のことである。覗くと、人っ子一人いない薄暗い雰囲気劇場は、まだ女の人の嬌声や男たちが蠢く声が聞こえるようであった。天井は高

言葉にした。それも若者が使う言葉である。「まいったつすよ」といった台詞である。「言葉が汚い」といった指摘を古い評論家が演劇雑誌でしていた。これには若い評論家が「この言葉なくして、この演劇は成立しない」と食って掛かった。まだ、

（松浦市出身）